雲葉和歌集　下

特別
へ4
8083
2

雲葉和謌集 下

ヘ4
8083
2

<98-196>

雲葉和謌集巻第六

秋哥中 月ア

月は哥の中に　　西行法師

わきかるゝハ雲井乃かけはさゆるは

月乃ひかりにえるさやさすらん

月を何ん哉

従三位頼政

いくぬま乃やまはわかれてかけひこす

ころやさきに月とやるらん

百首哥たてまつりしとき

一 後京極摂政太政大臣
風まさゝのこねのまきこさの山かせに
まらふ雲らしハいはゝ月かな
一 従二位家隆
秋の夜はやまかはわかぬなさえぬれは
こゝろそとなくいけの月かけ
名所の歌よみ侍しに
かゝとの風さりわか井（かゐ）くゝとのわたりて
くもりはすむかれいつれぬ松の月
長元八年関白家哥合し

能因法師
月かけはまことゝへくすてられし
わさかの雲さしはいてやまあらん
百首歌よみてまつらし小山月
藤原光俊朝臣
あまのはみせきの山乃たかねより
月のこゝろね乃けそらしこす
家百首歌よみ侍しに山家月
道助法親王
やまふかきは松風乃音やたひねわれハ

さ川のいかりし月すみまさり

題しらす　中原師貞

まけれは山のおくにふかきぬれと
いてゝこそまつかわするよの月

月の哥よ　堀川右大臣

ゆふくれのそらもさやかにすみわたれ
月のまちやわするとさめらん

秋乃山ことよめる　小野小町

やまことのおれをやとてつゝ
いく秋色ならんあかあら月の前　西行法師

ひかり伽にいかかに月そすむことは
あふみやま人乃こゝろとなるゝ

秋歌とよめる　小弁

ところもにすむ月のきらりけりせは
やまさといくにさえしかひまし

題しらす　藤原右大臣家小大進

やまのはにすゝしくのこるかけのそてにさへ
かゝるありけの風なる月かな

平定文

雨はらふ雲のふきやのいさまより
月そともりてそてゆくらん

鎌倉右大臣

うけ乃いかよひりかなそてそしらね
そとかつゆやまの秋のかけの月

道性法親王

よふひとゝもわらしあれそふ源山へ小
ま乃春ふわすくなかれの春の月

百首哥よめしけるとき

崇徳院御製

月こゝにゆきこそかりにみせさきみ
さしすはよいにいつくゆくらし
月乃春桂のかけて

右今法師

法ふわとこよひの月見さやさこ八
くりのいとせにくもやつかえ

題不知

柿本人丸

風まちてうきたる雲のたえまより見
みよふくもの月やくもゐ
花のちる月はきえてし秋とこそ

良暹法師

ちぎり猿ゆ宇はひかりをすさむ秋の月
しりしそめし雲はすみれと

崇徳院御時の百首歌に

左京大夫顕輔

あま河なくもゐにかゝる秋の夜は
月よりほかのくもゝかゝらず

洞院摂政家百首歌に

前内大臣

雲のぼるこのま露はあめのいろと
そらゆく月はくもとかゝらん
家にある月百首歌に

後京極摂政前太政大臣

こよひもよ待夜し
行く程はれしかばふ秋乃夜も
月をわけしよのこゝろしてくもと
山月といふ事を

雅成親王

きこゆれて月すむのゝみやまの
ふもとにかゝる秋はれしら雲

建保三年内裏歌合に

正三位忠定

すみのほる月はたかしやまの峯
秋のよすからねの志らくも
深行しけし月とこゝろ

僧正行意

あらひまれし野路乃さはかねて
くもれよいね月波のらんかな

承久二年八月十五夜内裏にて三首歌
講せられしはひころのあそひのることを
くれうるやとたちいさよひ月はこ
よひとすきわたるそらの寺しもの
小かるひとことものつゐもひかりに
にしそてあきにあるてもしもさいて
らきこゆ

従二位家隆

うろみはれひころたえの云されし
月ハこよひしあかゝりそゝく

土御門右大臣家歌合秋月を

侍従乳母

乃とかにもえやはなかむる雲たち晴て
いつれことはすれわたる秋の月

歌よみ合し侍りしに

平定文

雲井なりてつゆまさるともさやけさは
そこなてとらんあたの秋の月

洞院摂政家百首歌に

光明峯寺入道前摂政左大臣

月かけのたかくなりゆくまゝに
みつ川やここに秋風ぞ吹
みる上月とこそふかんと

小弁

うつしとるかゝみのかけはひさかたの
月とひとつのかけやみゆらん

後堀河院御時水上月といふことを
と海しけるにい風こそきかれ

中なりよるそいとゝさやか
なる月やかりしきしのゝ川をもみすらす

まひくにぬれおれの秋の月
名にたてゝ十三月と
京極前関白家肥後
かはかりもいけのおもてもくもりなく
こよひはこゝらくもめくる月の影
天ねはゆけくとも庭月といふ千代
内々人くもよこそゆけるに
菩提院入道前関白太政大臣
風しつみねのあちかすゑにしのひはゝ
こよひの月にをりひしらるゝ

百首歌よみてまつりし時
大宰大弐重家
あれぬひはこさとめつらしきひかりなれ
月やこよひにいくかまさらん
法性寺入道前関白家にて
源俊頼朝臣
にほの海なみいるさゝしきそめて
こよひの月のかけをしるらん
秋歌の中に
権律師隆寛

たのしくもこよひにゆけぬとかくへゆく
こゝろありしやいくよかけにけらん

崇徳院御製

秋よもいくよふけにけりぬらん
かゝる人ハひさしあかぬ秋の月
月乃かけよりこそなる中にも

西行法師

ミこともあはれかおもひしひかりみく
のちにこそひ乃月をわかうハ
あきハ月をのかほよひとのためともや

かけにかはりゆきそくいけらん
人の思ふにせよとも井て月まを
かかまて

惠慶法師

わか庭としもの花にさく秋の夜
月夜よしよし人にこそよし
花月百首よみ侍りしに

慈鎮和尚

ながむるにこゝろはいてしすみけれや
なくひとも月乃さきそふなからん

秋庭月と

順徳院御製

こころには清士乃焼火をたゑしせと
もしひするかせ月ハかくれへぬ

百首御歌乃中よ

あきやま乃よもをめくるこころすん
月ハいろそふあらしすまてる

後京極摂政家詩歌合よ月明風冷

月こよいありけり乃さとものおきみさかに
志ほみ乃風之まハあらしすけりす

おなし家十首哥会よ山月

寂蓮法師

月をいへはおいもそて山のあさみえつ
なかめる風をはさらしる乃さと

道助法親王家五十首哥よ野径月

中納言定家

むさし野ハ露なくみ乃とよおもきれハ
月ところもみさね山しうるさ

むさし野ハゆくともはかくすりはから
らうけさ河れ風まよる鶴乃月

百首歌よみ侍りける時野月と
前大僧正慈円
かゝしかく井かはゆりゆく
さくと袂にしも思月とみるかな
前内大臣家にて歌合に野宿月
中納言定家
ゆけゆけはいつくを月とあるまゝに
尾花ゆりとくる野邊の秋かせ
従二位家隆
あすかにに野路かゝみゆするふにかゝれ
いかなる人に月とみるかな
前中納言親覚
月すまはいくよまてかはかりまくら
ゆるゝもしらぬは山のみねのあし
崇徳院に百首歌奉りける時
皇太后宮大夫俊成
露しけき花のこゝろにゆとも利音て
野原の月のすゝきなかなるらん
秋そうつそてまつらし時月の影
家隆卿

しらぬまゝにそこつきにいひとこふは
つゆとこたへよたゝされうちかせ
あさちはらつゆしけし月はかくれ
ぬところなし

源俊頼朝臣

あさちふのあれたる宿は月はさし
ゆふくれやかはらぬみ寸をもてはやし
宿をもらしてよ流るゝ時雨宵月

皇后宮大夫俊成女

そてのうへまぬれみるれひかりかれ

月はそらひのうちにありすれ

中納言兼輔の家屏風に

紀貫之

梅利しけるゆきかとみゆる月なれは
ねたてさえおとてやまのはせ

月前竹風をよめる

宮内卿

竹の葉かえぬるけの露をおとして月きて
ほとゝきすゆきはなきにみなき秋風
紫袍袖をふ小

左近中将為衛

露志けさゝすゝき乃はま風やは八
ちらしそ梅こしに尾上秋月影
白河ゆきて関路月と

左京大夫顕脩

あふ坂乃関にしくまの乃ありらせは
いりて雲月也能とゝ見ゆらし

東路路尾上忠臣百首歌よ寄月

中納言

志らす志ら路すくらあふ坂の雲こそ

河ちかふ愛すらちる月は見ゆらむ

関月といふ心を

俊恵製

ふるさと利おく月も旅をそやかはらぬ
世をすつ乃あり雲路なを飛越さる乙

名所乃百首歌よて関は付

備正河意

さすらふ旅人ゝ線に関乃あすは
きこゆ乃そせら乃月越尾すらや

光明峯寺入道前摂政家六首に旅月

後堀河院民部卿典侍
清見かた月はそらにはせきもいれ
いたはなにかゝる秋の御は

百首歌の中に

後京極摂政太政大臣
うちよせかゝる波おちさえて小雲清く
いかしくそてふくるよの月影

和歌所にて六首歌合に寄雲秋風
法印静賢
草枕かまへふしの山風身にしみて

きよみかせきの月にこゝろせらん

後京極摂政家百首十五夜に
寂蓮法師
月すみてすまのせきもりをゆるしても
しらしすみてあまのはらかな

紀伊にて十五夜会侍しに海月
藤原朝臣
和歌乃浦風むしけよるはなとに
ひかりあきらしつなの秋乃夜の月

百首歌たてまつりし時海月

前内大臣家

浦路のうみしほひさのあかろよ
いそちやとる秋たちぬの月

藤原にのぶ

月のすはなしていてぬふゆらなる
しかのせきみとうすゑる舟人

平泰時朝臣

あかつきうきろゆかしてみんかた
こゝろのうきた月やかつらん

後法性寺入道前関白太政大臣

後徳大寺左大臣

いさよひのすむ月みけとおけゆくるや
ゆうしのうきとゝし舟はこうかう

建仁三年八月十五夜月十首の歌合に
秋の海辺秋月

参議雅経

秋はこよひつうへ明石のうらにすりへか
かれ月をいはさなる秋

海辺月といふことを

権中納言長方

よとゝもにうらふく風に雲きえて
あかしのせとにすめる月かな

和歌所にて六首歌合侍しに旅月聞鹿と
皇太后宮大夫俊成
舟とむるあかしの月みれはわけよ
うらうらとやとりせきとしはにゝ
月にあまることにはすまのうらに
後法性寺入道前関白太政大臣
まはにねをまつらしとおもひいゝつゝ
あかしの月にいくよねさめぬ

光明峯寺入道前摂政家百首に湖月
前太政大臣
しかのうらいつまえにのしれにほまの
あけのうらをふねは月やまさるらん

海路月と
前大僧正慈円
沖はるかなみとまらてゆく舟も
月のけるつしらくれまつなみ

題しらす
俊恵法師
かゝはにへとそひゝる月や庭にゝらん

さまえ乃そこころとめさしめる

後徳大寺左大臣

なにはゑみけゆくまゝに月すむ
きよ川乃ゆらやまくらぬところかな

海上月と

寂念法師

なにはかたあしまにわけてこく舟の
おとさへすみぬ秋の夜な月

千首哥よませ給ひし時江月

家隆

さ海うしかへり月つきはつ難波江の
りまおふつるに秋の夜な月

建仁三年八月十五夜月十首哥
会侍けるに月前松風

皇太后宮大夫俊成女

月まつおもひれもとの月かれ乃松風
こゝろはこきなくまれみせつれ

皇太后宮大夫俊成

月乃けしきつのくに難波のせに
山すふこれりなとよそれゝるこれ

住吉社にて月前松

津守経国

かみさひの月はむかしにかはらねとこゝゐ
うつしをちらん雲のあはれ給

海邊月と

従三位頼政

浦なみのひなるなとかすみのけまさて
まさきのまさしかれ月はにかゝりあは

題不知

寂蓮法師

風ふけはあまのまきはたつもなるかたに
ひきいくるみなかあはれの秋の月

浦月といふことを

藤原基雅朝臣

いはしろのむすひにむすふ松のこすゑとをく
まつらなるつゆもし原これ月そ

宇治にて六角卿会海すゝ経るは
橋月といへることを

後京極摂政太政大臣

こよひしもやそうちはすむ月の
なかもかちしみつへまつんなかに

経盛卿家哥合に

従三位頼政

かけやとるうつしはのさやけきに
月もやこよひおほそらすらん

秋の月と

後光明院御製

秋はまたふしとはいふる月かけよ
えそまてたにけれせてみさて出

浅水待月といふ事を

大納言経信

ゆふされはいつかやまのはのそらみえて
わかまつさけの月はまつかな

題しらす

慈鎮和尚

てる月のひかりとともにさしのほりて
をとさへすめる山海の月

湖上月といふ事を

光明峯寺入道前摂政太政大臣

さゝなみやくにつこゝにみえまつしこ
かけてもすめるこよひの月かな

山月と

俊恵法師

ゆく月はかこのやまをいるらん
ともしきはつるせきのかゝし

前内大臣家にて若衣月とは

土御門院小宰相

しきのあまのおりひもいれぬまそてに
わきはいろちる月やとるらん

題不知　権大納言

あけるにはまのつらひかる雪や
きみはなくねにかゝれ月かけ

土御門内大臣

あきよりはおれ月にはあてらすて
くともみえまさりけりのゝ

紀友則

しけりのまれつるかゝらるとちら
なこりおはくてあくる月のかね

建保二年内裏にて十五首歌合

從二位家隆

しらにかゝ秋乃さこゆかそうやあけゆらん
まふらはゝすゝましく月かけ

百首歌の中に

前参議信成

さをしかのみし忌ときくわけゝるに
こやまのこゝろ月なはまさき
月わしつけ郁しかみなさけ
なをとこて

平忠盛

うらふけて月すむよはのさゝなみのさこの
とのえみしやころわくらん
月前鹿といふ心を

前大納言忠平

さらしのもこのまの月の色こそや
こゝろつれなくはまるらん
和哥所にて六首歌合侍けるに詠月

家隆

こけのさくらのめしかみ忘れして
こゝよ月みをてかくされ

宜秋門院丹後

建保四年内裏十五番歌合に

前中納言定家

をしからくいやまのはけぬつかれハ
あるしまりけよ然月そすみける

建仁三年八月十五夜月十首歌
合よ古寺残月

皇太后宮大夫俊成

まうくひわらしのやま然すてら
すきのいほりよあるゝゆけ乃月

深山暁月

大蔵卿有家

しれとのこ行しこうれはこしるみ
こゝろよかり川なありけ乃月

野月露涼

嘉陽門院越前

わくれそらにさしけきいし尾乃末つゆよ
よられてやとられおけの月

ゆ宿見月といふへしな

祐盛法師

あけわたるハゆきされはやまのはし
月をまひ露乃とこやすらん
田家の人月といふへしな

後京極摂政前太政大臣

わきもこかしくこそはこれとゝふもしろ
ふしみのさとは月のこゝろすむ
家百首歌合に秋田
やまもとれしたのすゑはこゝろかれて
かれこめしけむる明の月
百首御歌中に
土御門院御製
こやまたにおもひさけて鳴志かの
しらぬこゝろに月ものこれる
あはれしれ

慈鎮和尚
うけれやよ月のひかりにあまりゆく
こゝろとせめれの旅乃たもとゝ
内大臣
風ふかきあらしにしらむものゝはらは
うつみはまけのおれわけ乃月
月乃歌とて
藤原宣方朝臣
くもかゝれこゝろはまよふともしのゝめは
いかよ乃月はとはかりかまし

月五首哥の中に
法性寺入道前関白太政大臣
やま乃端にいさよふくものあらは
ところ乃さとに月ハこそすめ
九月有明乃ころ
和泉式部
よそにてもおなしこゝろに有明の
月はこゝろやとたれにとはまし
題不知
源兼文
くさふかくひとりすむやとの
さわけ乃月にさそはれてまちし
源道済
わすれすてありし人をもこゝにしも
たく乃いさや乃あはれあけかた乃月
凡河内躬恒
やまさともうらやまれつゝあけかたの
月もいさよふにすみかれよけれ
柿本人丸
あまのとをあけかたにいりしに夜の
まつられ月のかつてまそらとし

伊勢

いるまてはしにゝゆく月かけの
かさゝきにかゝるしらくもえ
中納言家持

ちふる夜のよはのけしきはけしもゆくを
ふるさとやまに月かたふきぬ
雅成親王

月のいるこゝろはしらしわれはたゝ八まこそ
はなりふゝきれらのらしと
月のいるをとこゝろ
恵慶法師

月せいりやまのはをすみさとひとく
らふひてもりはこそやおかへし

和哥所哥合は海辺月を
後鳥羽院御製

ともろこしのやまひとはまたなかめえ
まつらかたのあけかたの月
百そらみてそかつりしらぬ
後京極摂政太政大臣

秋風にしのゝこゝろふる人の
へしかきにすむありあけの月

月をよみ侍しに　　前内大臣

やま乃はをあまのかはらにまちわふれや
月のこゝろねもこゝろゝ置侍

百首歌の中に　　藤原隆祐朝臣

ゆく月にゆくへをうつさんあまのはら
ひとりよしやこゝろにてるらん

雲葉和歌集巻第七

秋歌下

秋のころよめる　　侍從

あきふかみ風まのかけのくさまのゑに
こゑりくすゆふくれの空

和泉式部

おくやまのあきのこゝろをしらすして
しらぬもかなしかりこゑゆふくれ

百首歌の中に

後京極摂政太政大臣

まれにふくこやまのおろしいかならん
まけうらそうしさしのゆふくれ

日吉へ百首よみてまゐらせしに

慈鎮和尚

ゆふまくれしきさふのつまれはろ
わりひかりとなるそへねまさり

秋十首よみてまゐらせしとき

後鳥羽院御製

なかめはまたもたえせぬゆふくれの
こやまのあはれはこゝろすこきも
小野宮家歌合に
さひしさはいつもかはれてなれゆけん
まちにおもはぬ秋のゆふくれ

百首御歌の中に

順徳院御製

ひとりぬいそさもさびしきはいさ
こゝろからしほのあはれのゆふくれ

前内大臣家の十首歌に秋海雲

前議信成

そのいろとなるかにかくれやまもなし
なきもゆくあきのいろしこそ

百首哥たてまつりし暁露

土御門院小宰相

わかるゝもおなしなかの山のねおかしき
秋ふかきのなかに

藤原行能

ねやちかくうつるかはしのあけの月八
なれなるゝひてこそさかゆかし

題しらす

従一位右大臣

山のはにやのうへにかゝりねなるすゝき
おもふ事すゝめにしらやとくらん
くれぬるゝつゐてのいねかゝるく
まつらむいろいく[illegible]の花

権中納言定家

いふなんこくのくれぬしもあれ
そらよういろふきのひかりを

藤原隆祐朝臣

あきのいろはつきよりふかきのうへよ

あゆつきりふかきはの色しらく

月前菊といふ事を　正三位雅隆

月すめはうつろひそむるしら菊の

まかきにてらさくにほひやかほる

百首御哥中に

菊つゆ　御製

いくとせかさねしくしらの菊井まて

こころそえる孫わき風そ吹

家の百首歌合に菊を

後京極摂政前太政大臣

うつの山こえしくもゐのおとかれて

つゆのうれ葉にあられ吹

題不知　前大納言忠良

しらきくの花うれはしきさえ久に

霜のふるけてあさきそ吹

名所百首哥よみてよみ侍りけるとき

順徳院御製

あつまとの野はれのちせきかくれは

まくらこそかれしかいろそ見ゆる

前中納言定家

ミ川くさのとかせくすハ秋あまのすむ
さとのしるへとおきつ風そ吹
いこまおろしも秋の色よふく
てそめのいとのよるそみたるゝ

暁月し待し附
藤原基俊

かきみかるらしけてさ川かもよ
おきのめのまよりとあかしかね
百首歌の中に
土御門小宰相

ミやまゐもおきハつきにかふかけを
たちくれミ川のをとかつなまて
崇徳院百首歌中
藤原季通朝臣

かきしふちるかみちえるふ紅葉のさ川をそて
つゆやとふのこあきとやしらん
題不知
源英明朝臣

ちるこのハかきるるしもよみとも
やまちのすゑのあきハつきハ
百首歌の中ハ暮秋を

順徳院御製

とにくにうつゝしあきもこそまされ
せきのわらやもゆふくれの空

暮山松といふ事を

前中納言定家

あれはいぬゆふ日かくれのみねの松
まつものこの葉のちらよあらしん

百首よ

八條院六条

ゆきもえんあれはよるのはあふ人くへ
まちのわかれをしはしまさし

百首歌たてまつりし時暮秋を

大蔵卿有家

かね添ふしゆふ秋のわかれをもをしまるに
またつきぬやをあたにうらみん

題不知

源公忠

うちそてこそつきまりぬれのそて
さふ色れあまきの日をすまうれハ

寂蓮法師

あすはくまにそつまのまうれハこれかまたぬ
またまたやこそふへまつれ

高野へまいりて元性法印の高室にて暮秋述懐を

西行法師

なれきにしみやこもうとくなりはてゝかなしさそふる秋のくれかな

秋歌とて　鎌倉右大臣

[illegible]ゆくゑもしらぬ物をおもふ[?]
[illegible]のしから[?][illegible]ゆふくれ

和歌所にて六首歌合に関路秋風

皇太后宮大夫俊成

こゑしもあまた[illegible]秋は[?]すまの関[?]
[illegible]

秋歌に　前権僧正澄覚

ふく風の[illegible]はやま
まつにはわかやときはなるらん

百首歌たてまつりしに

宮内卿

[illegible]のはまてはなさきて[?]
[illegible]

千五百番歌合に

後鳥羽院御製

ゐまさこのころの三ふ草まくらすひさ
みるさこやこよあきかせそ吹

詠不知　能因法師

夏の日もなけにすゝしかりけれての
ちくそはわれそいろつきにける
秋なよ

和泉式部

もすゝてまさきの袖ゆきのいろつくハ
いれのはらとすゝめ露やおくらん

百首の哥の中に

皇太后宮大夫俊成

雲しるさまあきとつりてやたつたひめ
わきのりみちのいろをそめしん

洞院摂政家百首哥よみ侍しに

源家長朝臣

ときこらすゝふしのちやまこえてや
あれ城やくひのきまふりたれたん

百首哥よてまつりし時紅葉

前内大臣

ひらくれいくしほそめてわけつらみ
なれきのもりをみちしるらん

承久元年内裏にて十五首歌合に
よみ侍りける

前中納言定家

とやまなるまきのしたはもそよきける
ゆふくれのをきのはかせのかはらに

従二位家隆

しくるとはぬきとめぬ人のみるそ
下葉のこゝろよわくそはのこされ

名木のよこたによ

紀貫之

もみち葉乃ゆきもしらすて秋はたに
みすふやこのやまのへにゆく
承平十五年会に

寂蓮法師

あさことにうつろふいろをこきそへて
しけりははつれぬまてこそさく花

菊花写水といふ事を

前参議雅経

きれぬれハこくハ水まよふつまを
うゑをんハうけさかゝまし

暎風知菊といふ事を

白川院御製

ゆふされはかゞみのみすハこくみゆる
みかみまされといつめさてやし

秋歌とて

大貮三位

草葉まてこきけいちるつのすむ秋ハ
しくれもやらぬ袖衣なりけり

水ニ郷まて秋すさましき河を
し時

権中納言定家

かはきりのくれもみえぬくれなゐの
いろにたつけれとあかねのこすゑし

亭子院御屏風に

伊勢

うれしつゝふちせみなくりみちつ
ふくあきそいろもみえける
紅葉のうつろと

三条内大臣

天川うらやましゆくあれハくるらん
りみちうきぬやまんはそちる

崇徳院御時百首哥に

上西門院兵衛

うきくものありあけのそらみえしきとハ
きくのこひすもわかれやらん

暮秋の心を

源家長朝臣

あまのかハわかせそつやさそふらん
雲井からちるこねのりとちハ

題しらす　よミ人しらす

かすか野ハしくれふるらしあすからハ
りこちわさくんとぬかまとれ山
なをやまのこらねみりみちハおれける
しくれにあめしますみうし

堀川院御製にゆとこそ

素性法師

あきふれハりみちもかけまくれつ
堀川のやまふきやくるらん
りみち流そて

源信明朝臣
庭まひえんのちくのけしきそうつくしく
色川しおもとは朱さひよかり
仙洞にて庚申夜紅葉かやう
遍ぬるよ秋卯と
恵慶法師
さ川ちやまかねてしられとをりひしれ
かりとももみちまさのわしみ
百夜も旅てまゆくは
前中納言定家
らまてあきてうけろんやとての
りみちもしさるのれよされせん
洞院摂政家百首に紅葉
前太政大臣
ゆきけふしくとゆくちりくともみ
かつもれやまはもみちしぬらし
延喜御時の御屏風に
紀貫之
くれないのしくれまさりつやいそみつゝ
みるらんひとに時雨とそめけん

題しらす　　萬福女王

さやかなる月きさのちのいろにこそ
とんとかく人の心を秋のよの中に

信生法師

身のよりみちもあれはてし山風や
ふりしのまゝしくれふるらん

花百首よみ人々にまかりける時

順徳院御製

吉野川みやまよりこそちるらく秋風に

あらくいろ川くま川のさしつる

百首歌よみてまつりし時

慈鎮和尚

いさゝかくすらさい川くさん秋極れ
あ川さぬのさをにりくちぞなりころ

承元けか日吉社奉納侍しに

後鳥羽院御製

あ川さはりこちやつきてるらん
いつくとさゆあきぬこかとき

九月のころ

信定朝臣

まろ秋のゆふねのすゝきをはなに
こゝろからしるすゝの秋の露

水無瀬にて秋十首歌たてまつりし時

従二位家隆

秋の野はさてもやとめるしきと
わきもの露るしぬゆふくれもなし

建仁二年影供歌合に小風頃

ことに草

民部卿範光

わかれつゝやまさきハかれハ小こゑにくく
あらしふくかりぬ野辺のあさ風
秋草葉なし

藤原成範

三室のやまいけるもかねすゝきの花も
まゝしハうりめあきのせそてふく

山塞草といふ事を

正三位家衡

山かけのこみしきつゆやさひしし
あきらいろつくあらしふくらむ

よふかれハしつのわらやのまとにて小まくら
月かいくたひころもうつ哉

秋歌の中に

雅成親王

あさゆふのふきそしねをつゝいまうりや
稲葉もそよけれのよるそさひしき
田家秋といふ事を

権中納言忠信

こひたれしハ乃いかりハかりそめの
いかなるそわかすめつゝなかむる

題不知

柿本人丸

こひつゝもいなはかふわけ家井して
とりしくともわすれのゆふせ
かつてみて稲花風秋

大納言経信

ひさゝくりつゝしめるはのあいはまて
わさとさそふてさやかきをゝ月

秋のうたとてよみ侍る

きつてきてかきるのにみえかるかさしみ
あはつれのきさいのゆふくれ

百首歌よませ給し時河紅葉

院御製

なかれけるもみちそとまる大みかは
井せきやりしもみゆるらん
大井河よそてりみちてくもよに

[illegible]

大納言経信

あきゝりのすむちるさかりせは大井ふ
りこらとうくあきやかれ

千五百番歌合

後京極摂政前太政大臣

こけのうへにおちしもみちもあれ
そてもきえたりのきをみる

西園寺入道前太政大臣

きのふまてあらしの風にさそはれて
あやなくもりつくこねみちぬる紅葉
月あかきけるよ入釋迦のかへ
けんかしける

慈鎮和尚

紅葉ふく風のやとりは小月とちく
しくれふるあきの庭のうつろ

十五番歌合侍しに同擣衣

順徳院御製

秋の露はいつもぬれてしなへしのと
さむるさとしけりかこころうつらん

名所擣衣といふ事を

後鳥羽院御製

さよころもうつてもいろやのころも
しもあるる川によはさく

前摂政太政大臣家百首歌に

右近中将経家

かりさゆくころもやまへのあきかみ
しはしねてたえころもうつらん

百首歌たてまつりし時

参議為氏

よそのめもうつつさめやらぬよは
あふみやしつくころもうつらん
秋ふかき二のよふけて

後久我前太政大臣

風さむくかさねのころも夜ふかき
しらねのころもうつ人もなし

光明峯寺入道前摂政家百首歌よミ
侍しに　前内大臣
いりかたきれいるさのよそにちらすひれ
やまのはつくしられてうけ

建保二年内裏にて秋十五首歌合
侍しに結　僧正行意
そてしらかるしまけれのつゆもしす
ちりけくしゐまよやふけぬらん

閑庭虫といふことを
権中納言顕朝

あひもこぬ人まつむしのをとたにも
まくねさむしろよはのあきかせ

秋思　大納言典侍
いゆふくれあきちかはよはのむしのねに
けすしまさるあはれの長月

暮むしのこゝろといふことを
源以
暮むしつのうこゝまて月はてらせや
まつしのねのくさらん
なかひとにわかちのつまあはすさるまて

よそやかしつみわたのりみちに
時しくれ

前内大臣家

いみちあさ紙をそめてこそ秋山よ
おくてのもしやつかん

水無瀬にて秋十首歌よませ給ひしに

前中納言定家

ゆふ川くひひのをとはすりみそ
まきのはにさひしきあかれのはけれ

洞院摂政家百首歌よみ侍ける

民部卿為家

くちかしかひしかそめのこすゑに
いはくのやまもさえしくるらん

朱雀卿家百首歌に

白川院御製

ちくそのしまくらちれりまさや
らくもひとはいろまさるらん

題不知

曾禰好忠

さわやまのしめのあらしりみちに
秋まちりささにさうやゆふ時雨

百首哥よませ給しに

前内大臣

有あけ乃月はいりぬるやまの端を
なほおしからやまとしりみちらし小春き
秋のとく

惟明親王

いか月まて重ねける色紅りしらさん
けふてあらしのやまそさりけむ

承久元年内裏哥合深紅葉

前太政大臣

もみち葉はちる川乃なかれけり
風ハゆきてよいとふみのこえん
秋けるの世中よ

順徳院御製

なきゆくりみちやおなかまおほせふ
みちとすゝにあらしのなし
名所秋のそてくつらしよ

参議雅経

この葉はよりこらハうつるあらしひきさみ
紅まかみひかるあらしふかれし

一　題不知　　式子内親王

をりくるもこゝろひとりのあはれのみ
ふけゆく雲そまちうちさくれける

同九月盡之夜

従三位範宗

いねかてにはてなきやこよひ秋の夜の月
すはなから月のわかれさあかなさ

家乃九月盡に

惟明親王

あけゆく空はつゆとこゝろに袖なくよ

あるにかもあきのいろやのこるらん

雲葉和歌集巻第八

冬哥

初冬のこゝろを

壬生忠峯

やま乃はつくしそあらし志くれしろ
けふとさまりふゆといふらん

藤原清輔朝臣

おほゐかはもみち乃いはねをこしてゆく
きよたきしきはうらしくれつ

皇太后宮大夫俊成

いけしらぬかきをはさのしられかな
つゆもまたひねあきのゆふへに
院御製
わかくらし雲乃いつてこを追ゆく
あまりしくらりふゆやさねらん
百首御歌に時雨を
土御門院御製
それ竹のおとよりハこてとのかつ緑ハ
しくれふりゆくまつらなもし
題不知
皇后宮大夫俊成
をそぬれぬもしまたいそのまつりなか
ふけゆきさむきしくれすきゆく
年そそそまきつしまよ
宮内
しくれはこゝろこそあはれきつれて
こゝろのすゑにくもそむすゆく
百首御歌中に
順徳院御製
いつくとてしのさとみしくるらん
とほやまのすゑかつらきのくも

題不知　覚仁法親王

春をすくるかそしられ乃をゆへん
ひつし乃やま乃あらねはしれ志へ

従二位家隆

さひしさはそれとなきさハ乃こゑまて
いろをみくもみえしられける

五百首歌の中に

後鳥羽院御製

いそくりま乃葉のいろかはるらん
きのふまてもしられけるころ

百首歌たてまつりしに　寂蓮法師

音羽のやまのたにかせにしもさえて
志らくもまて八山ふ人もなし

五百首歌合に暁河雨と

前中納言定家

ゆふくれのまつ乃すゑ山今ハとて
なかむる枕もうら川なみつゝ

建仁元年内裏十首歌合に

参議雅経

きみ人のこゝろもかはらましの
風そかけてあまのうく山
八幡宮へまいらせし
慈鎮和尚
そむきてもちぬ袂り何かはそて
ねはなのつれ秋廿日月の秋
なれしし涙
光明峯寺入道前摂政太政大臣
をく山にかはりしはつ我神の
みにかへるともをしらん

わかものゝあさちかはらくふるかりの
なかとのうへにし志賀のみなと
柿本人丸
山川のうつしまさへかはれとの
ゆくることに我のかとしハ乃ん
百首歌の中に
土御門院御製
たしひかれともしとかつらのはこらん
このもかくうらのあさちふ
遠北法親王家百首歌に 朝時卿

もみちくる庭はあさひのいろなりけり
しくれてくもる宇治のはしもり

西園寺入道前太政大臣

春日社哥合に落葉

もみち葉てひとよるころせは川ぬあ
ろせの旅乃おもひけるかな

宜秋門院丹後

よはのおもひにたえきそひとつこゑにそ
かはときゝいせれみちかへらん

花山院前右大臣

千首哥たてまつりしに

この葉ゝちてあらしそすみにたれやま
うらかなるすましきみねはなし

参議雅経

百首哥によみけるとき

こゝろやましくれにきこし吹風よ
ねれなゆちるうねのもみち葉

後鳥羽院御製

十首哥合侍しに

順徳院御製

神無月わらしのもりもしくれめに
いろこきまさりてちるこの葉かな
題しらす　前大納言忠良
この葉さへうつりゆくやまかふか
わらしもたくやけしりらん
法性寺入道前関白家歌合侍けるに
落葉
皇太后宮大夫俊成
いろいろのこの葉なかちらしもちて
きはのもみちのなかにまさらしはの花

閑居落葉といふことを　前参議親隆
そのかみのこの葉そのにとや
ちりつもるまふしはかりしきるらん
百首歌中に　慈鎮和尚
よひのまはこのはにそてのぬれつれて
しくれはさりぬ月のかけ
冬歌中に
坂上是則
くもまよりきこえしのみかけしき月に

しくれもらしる山のいはねそ

十五夜歌合侍し山家秋月

順徳院御製

やまふかみしくれやともにゆくかよふ
くもゐにそよりくしらぬおりはけの月

小野宮歌合に河月を

後京極摂政太政大臣

しらくもにとくれしきゆる河よはの月
きよすみかれのいくめしらして

題不知

寂蓮法師

ちよま川ともしもみちをわけてまたふかへ
わすれする風さへ小はの松もなし

冬歌とて

西行法師

あらし吹くみねのこのはにともなひて
いつちうかるゝこの心なるらん

冬歌とてよみ侍し

寂蓮法師

さゆく小そらのねこのはれぬとまるま
いりひのかけもぬかしの入日

千五百番歌合

権中納言長方

しら川のしらきのゝみなかみとをとめても
われはかへりしわきをこそしれ

春日社に奉る歌

大蔵卿有家

いまよりもみかさはいくよかさぬらんの八代
名をそへてやまのあらし吹ころ

百首歌奉りし時

式子内親王

秋の月こゝろのやまの山おろしは
くもゐにもとめてきたるはや
ふけて神なそてさへいろまいそねとめ
露ふかきしろたへころものこしいし

読人不知

月ほにこそあはれとよみいふかきつれ
心もとしれたまふにもとこそあらぬ

俊恵法師

百首歌の中に

土御門院御製

ふるさとのやまのしはまれしはりかもと
なれとしもつきさえゆくよの月

建保四年内裏十首哥合にしよ

前太政大臣

りみちせしよその雲間はあれなから
月そかゝらぬ秋そのこゝろ

冬哥とて

大中臣能宣朝臣

よはさむみこほれるのしまとこにわたるせの
けふも川しらぬはきさへかゝりしも
氷せる月やころすゝのしもさえて

三条右大臣

こゝろしふかしきよみ月とさえぬらし
うつりしこやこほれるしもし

朝寒霜といふ事を

後京極摂政

まにはえやよるこほりけむのきとくて
あしのかれはよのこゝろあかつきよ

冬哥の中に

正三位[illegible]製

ねさまはこやあまのころものうへそに
くれさるあしのかとそえさひしき

七百首歌めしけるに山家を

後柏原院御製

しはしまやこしむろ山のいはこすき
うき世にわれしもさゆるころ

冬夕旅

前中納言定家

ひさむしろふくさそふも夢のかよてハ
ふくひとふしとさりけく

百首歌めしける時冬のうたに

院御製

かさねつるくるしきものをわすれぬ
おきのとよりやかはさかるらん

千五百番歌合

前大納言忠良

いまはとてわかれゆく雲のうくよ
月はさそしをみしのそら

二條院讃岐

雲ひとよそのよれしくさうりを
られ乃こえねまは乃あさちふ

百首歌の中に

順徳院御製
やまとはうれのすまれしとしれぬ
ねそくハうつはかわもたましし
詠人不知　藤原兼清
ありまちやそれのつゝき風わけて
きえてよするころのしまのうら
建保四年内裏十首歌合に
八條院三条
をひころもとそねてしるあきまて
やとりし秋の月ゆかしき

百首歌よみ侍りけるに　[illegible]卿
しものゆるかりしのはやまのことのは
すゝよふかしいつれかなるらん
詠人不知　菅贈太政大臣
まけのゝまひはしてうれしさを
なにはやこふをはけしのし秋
遍昭和尚
しをれのまくれすゝき秋ふかくて
おもふこそ月をみるらん
西行法師

さひしさハおきふしにこそまさりけれ
れの袖てらしにありあけの月

後京極摂政家十五首歌合に
後法性寺入道前関白太政大臣

みやこ人月よとふよのよはのかたは
あきこそしらめしもあらぬかなしかれ
冬のうらとて

寂蓮法師

たかしの野の草はらしやとにすむ月や
みゆきこそのこりかならん

題不知

俊恵法師

ちとりなくみなとのこころしふきさそて
なみまにのこれあり明の月

中納言家持

ひさかたのあまてるそらにちとり鳴くなる
いかりゆけはつきかくるる
月くまるなかそらまらしとさして

藤原範永朝臣

こよひれのあしきみ月のあけゆくに
かきてたちりのかれゆるる

千鳥をよめる

行意法師

さよふけてすくやかはせのむらちとり
はるかにきこゆあさしほのこゑ

家の千五百番歌合に鵆をよめる

わかのうらこといりえの舟のとまりなる
やそしまかくれしほさひになり

前中納言定家

はまちとりなるのうらそでちとる
こゑふきすりふかさのうみよ

参議雅経

あふちしぬわたるちとりもなくなくの
うきまにさすたなかはかせ

千五百番歌合 前中納言定家

うらちとりそてのこれそひとし
りつしかつかみよ袖を

家十五首歌合よ旅泊千鳥

後京極摂政前太政大臣

をのれなこそひこゑさまちとる
すまかさねまとのやねまて

寂蓮法師

さやこたまゆえらしつゝえ千鳥
しほはまくにちゝのうら舟
名所よみ侍しに

源具親朝臣

こほりてもさえゆくしほのさゝちる
かけはてゝ吹あけのはま風
千鳥のこゝろを 土御門院御製

ゆふくれのうらもさひしくなく千鳥
いるまあまのそてぬるらん

まつさしきこ川のはまへのさよ千鳥
ひさのゝしほりにおとやなけつる
秋歌 法印[illegible]厳

月すめはなはぬれともみのりきて
かこのまくらしけとうら風

西行法師

やま川よいさりてはすみそめし
こゝろしのあさのめくれは
名所の中に 権大納言公実

ゆふされのかはらかせのよへ

かくとめしハけもいろにさゆらん
源師光朝臣
しきたへにまくらさえしもおきそふよ
いまはらすりよ杉人たえやすれ
題不知
前参議教長
こけむさのしもさむからしあらし風
こりのとこはいくとせかへん
源仲綱
よとさしこもちぬかきのあしのまに
みえしるかハけしらすやゆきを
修理大夫顕季
きさのきもたちくれ水そよつゆゆく
そさきみえこれそこよるしろきしし
家十五首歌合池水氷
後京極摂政太政大臣
いけ水はいくたにあらしのかきりそて
これ人かれのこほりさえらん
崇徳院御時百首歌よ
藤原実清朝臣
あるしのハらわり井よこりさえけりみ

ひつゝみてまさいくよさらん

冬氷といふ事を

藤原隆祐朝臣

さゆるよはこほりとくらぬまつは
しらゐいそやなきはたゝらん

百首哥たてまつりしに

光明峯寺入道前摂政左大臣

かつこほるもゆらしきひとはゆふには
とけてねよのこほりまさるらん

冬哥とて

曾禰好忠

すゝ川やそとのこほりのかたくるまは
こほりやとけてひとよあかさん

建保六年内裏にて七首哥合に

冬河風を

藤原康光

ふくるゆ小さゝやとよくこほりそら
川なかのうちゝれとすゝしるれ

洞院摂政家百首哥に

正三位知家

すゝきまくらこのはとともにむすふらむ
けさはこほりのみてれたつらこ

建保六年内裏哥合に冬池

前大納言通年

こやのいけあしまのこほりさえぬらし
わしあれゆくみてけしたし山

百首哥たてまつりし時

前大納言忠良

あさかりけさゆるあしまをゆく舟の
こほりをわくるおとのさむけさ

氷をよみ侍し

恵慶法師

なこすらあしのうらはもとすゑは
いけのこほりやとちらそてつらん

百首哥たてまつりしに

従三位頼氏

かゝみなるいけはうしとのいけよりもかゝや
よるのこほりてそまさりきらん

前内大臣家にて百首哥よみ侍しよ

湖上氷

民部卿為家

さゆる夜ハことさらゆくまかのうへハ
こほりそらしもひこほりける

守覚法親王家五十首中に

寂蓮法師

かちひとのこゝろのそこのうちわれてにこりぬ
つらきまてしめれぬしかみかなきよる

氷留水声といふ事を

皇太后宮大夫俊成

ふゆくれハきしのつりと氷のをとたえて
いはもりくるたえるをとそきこえらん

題不知

中納言

ふゆきぬとしのゝやまのみたま水
をとはやみえてれさへそこをとつるらん

百首歌の中に

土御門院御製

たくしまへまちえられしまてハつれなくて
あられふれはるかふしいさきのまと

寂蓮法師

さゆる夜のとこのまくらこほれのむしろひさて
こほれふかあれはやあられふるらん

題不知　曽祢好忠

いとへやまよふかけのさきそみえね
あまのすれりをもれさすらん

寛元二年十二月東三条詠の夜
流かハふりけり

院御製

ちとせゆきのみゆきにかなへ
こよひやみやこへつらふらん
しくし

前摂政太政大臣

ちよ重ぬしわれとおもひとも
こよひそいのるちよのかさね

詠不知の作

中将

きよる雲くしものねくまほのぬ
わかなさきいいろそうもし
色にとすると

民部卿家

あらくれるやまのふしのそれは
ゆきけしくれてかくらもしくら

汀残雪

藤原清輔朝臣

くれゆきふかまよはあとはつきせて
まかあさくて人はまかりぬれ

読不知

藤原信実朝臣

けさみれはのさえられはゆきまよふらにゆくら
さくらさくまかはのきさかれとて

山家雪

大納言通光

やまさとはあさけのくれはみちもなき

このさとにゆきはかりつゝみ
冬のこゝろとて

中納言家持

飛鳥河つはをしらたかしうつきもの
よしのかはさえゆきもつもるを

題しらす　曽祢好忠

かつくへのはなりまけりあめのするる
いつきなきやま雪めつきらし

雪埋遠山といふ事を

堀川右大臣

いくたりにそまつれ山の雪ちかめき
こすゑにていくへのゆくみち

後京極摂政家にて名所雪と

前中納言定家

雪をれのそまやまのさと道もなし
あとふりしつらけれはくこのさと

家に百首歌よみけるに有明を

後京極摂政太政大臣

そのまゝにをねのあらしのいさよひて
まさきのかつらしゆきのひかりは

中務権大夫家房

あさとあけてこやこのうつろむれは
ゆきのこすゑやふりくさみえて

寂蓮法師

かつやひこころりてさむしあらしの
月くわのこほりの〇のしら雪

暁雪の心を

俊恵法師

ありあけの月ハつゆとあさくれし
まち人のふもとのゆきの雪

八幡宮法楽書家会に寄月

祐盛法師

あきはすきたるはたこゝろするくさあに
月とられとゝらすまてゆふ
冬かなし

従二位家隆

さしのほるしのきのみねのこのみねにさ
ゆきハころものうしろにつかはけり
百そ〻人くまめしけるとそ〻ゆるそ
月

院御製

あらきくのひろさてまさるそのよる
月のみかにゆきかけりきらし

関白として年成

土御門院小宰相

たちひやれきのかけやむかれて
ゆきふれそらしきあかさか山
それしられ

中納言

あかきの〳〵こゝろのせぬとかすりぬらん
よひくもにつりさてゆき

後京極摂政家にて三首歌講ぜられし時伏見里雪

八条左大臣

わさとこそかれぬるはなつもりしそて
ゆふくれあらしこのゆきのあけほの

宜秋門院丹後

さゆるよのゆめちはゆきにまよはれて
ふしみのさとはひやするらん

杜明雪

前参議雅経

あけぬとてねくらのとりのさはくよ
こすゑよりきみゆるとめのまつゆき
そのあさよ

後久我内大臣

をいかくのうらんれやまのねともけく
いはさくゆきのいろやそふらん

題しらす

正三位知家

あられくよそよやいみるますかくし
むかひのをかにつもりしらゆき

前内大臣家にて百首よみて雪を

藤原成茂

雪さゆるふしのさとはふかゝらし
そらかりくれぬあしひくるし
冬夜の中よ

従二位家隆

みよし野はまきのしたはのかれより
とふものこもゆきぞあとねひたるし
時行絶けるよ

従三位頼政

けふいくかゆふかきくらしこす川ん
こしのしらやましらねなせし
ゆきの家とて

後徳大寺左大臣

ひさかたのそらもまよひぬかくれ
さゝまのふしみゆきふりて八
光明峯寺入道摂政家百首に家なし

濱雪

前中納言定家

松ほとものこゆるはまゝせぬれにそ
まかとゝみけしうつゆし雪

海邊雪といふ事を

祝部忠成

すみよしのこすゑのまつのけみさく
たりしねのこしにふりつもるゆき

百首の中に

藤原相高

けさみれは雪もふりけりのうらなきや
たま川のえのなきにつくまて

後京極摂政家にて詩歌合侍けれは

雪中松樹経

源具親朝臣

たかみよし川えあまきにふりにけり
ゆきをつもりやまかせもちる
をいしま

平泰時朝臣

雲ゆきのかくるゆくあとのきえぬよ
きえのこれるやあまたふりのかけ
ゆきのふるとて

前内大臣家

いせのうみあまのしはさのりしかな

きえぬまそゆきハなをかく

雪中遠帆といふ事を

後京極摂政太政大臣

さそらしかすらゆきにたゆたふ海の

うらのなかゆくさをしらぬらん

前内大臣家十首哥に名橋雪

藤原経家朝臣

ゆきとわれよのこうちのもしら

ありのたなゝぬおほかけを

たいしらす

少将師卿

なゝゆきのしたくゆふなたちをきまろひ

いつくさしのわかめのうらまし

光明峯寺入道前摂政左大臣家七首哥

合に遠山雪

正三位知家

けさこそはふかさやハのこゝまでひとの

ふかきましるかよくらはしとゆふ

をそくなるよしゆくらしよ

前中納言定家

たつた川せゞのいはなみかゝりけり
あらしにくだるゆきの白なみ

建仁三年新宮歌合に詠けるよ落葉
白雲　　寂蓮法師

あらしふくみむろのよつれる紅葉の
たつた川たえられは川のゆきかされ

百首歌よみ侍しに
　　藤原家隆

みむろの山のもみぢのゆきとゞまらぬ
ふきとるあらしのおとそみえし

題しらず
　　俊恵法師

三よしのかよ野のこゝはよゆふかれは
たつた川とりこもやくりせり

百首歌の中に
　　土御門院御製

もし紅葉のまれしのかりをとられて
いまひろとへにきてしするといふるを

春をまつ川といふかは
　　前大僧都

あけさゆくそらのこゑひとつかりゆくハ
られまこゝろのいまはなまし
色いろみす

紀貫之

ふかゝらくかりぬるふゆのおほそらハ
くもれはかねそてゆきハふりける
そらとて

皇太后宮大夫俊成

とのやまはやくすゝなまこゝろうつ
川まさしさまつりるそし花

百首歌の中に

式子内親王

うけこ火のおくりのさとみさよ梅けて
こまうにありぬる井のてすゝひ
行き社へ百そうてそまいるれ

慈鎮和尚

すゝしハはまひつりさのうみれハ
うきんハそうしとやそしまきゝん

土御門内大臣家哥合に海辺霜

二條院讃岐

あらいそのいたちのわりなきをみ
ばやくもえぬとしのくれかな

百首哥たてまつりしとき

入道二品親王守覚

すきぬるもそしみつまひらいかならん
ひまゆくこまもしばしとまれし

雲葉和歌集巻第九

賀哥

屏風のうたてまつりしは

紀貫之

わかゝしくあらことしほりとせぬ
ちるのちくめしりひとそすく
子日なうるつれ

能因法師

そまめ稀のひまはちなかへて
いまふうらうこそひくらん

通房の誕生の時七夜の事さたしまうて
まゐりけるついてに　法成寺入道前摂政家に
うし色そてゆふつゝ松のわかえさし
千代とかあつまれるのこゝろとも
中宮の御屏風に人しもまうりて
松のしたにてむかし花をまつ
ところに人をよめると
　　前大弐経
あらそひてあれ人すりすいみかゝかし
まさたもけれたもれのもとつき

おなし御屏風によみはへりける
同比　　花山院御製
ちりぬのもとはちるきぬるのころも
えをもしけるにちよみあさ他
　今後皇后宮にて池上花といふ事を
　　　　中納言右大臣
ちる花のつてこそまてすめるいけ水に
ふかくもうつるかけいろか
ちてぬくめかれぬけそ
　　大納言公経

さくら花とかつちるみゆきにまよひてや
ひよのこゝしハとまにあくらし
色ハきえつれ

従三位範宗

もろともにこれなからやまさくらも人は
こゝろとしるらむよもの色をし

従二位家隆

うしとおもひてたのむくもれるやとの松
けふしきりしよのなにとかは
絶為しらしをそれなりけるはよ

まさにまちかねたりける

禅林寺入道前太政大臣

えのきやまをみしさそらのいろ能はしは
きさよさすしのさくろすらん

建保二年内裏にて秋十首歌合

経し小秋経を

皇太后宮大夫俊成

あきかせのひとよにさし沐のみてよる
わさせのおれハわつらゆこの年纔

建久三年中宮御方にて和歌会

けふは月契秋久といふことを

後法性寺入道前関白太政大臣

こよそこのをりふしことよせはつゝむ
あきみちやまて月はみえける

宗清院といひける時仁和寺にし
九月よ行幸ありてしも色ます
おりけるに菊契久を秋といふ
事を

侍賢門院堀川

くものうへつよりかへしこゝゆる菊をかしな
そうにそらはの秋ハちかうし

九月八日菊花を

文武天皇御製

あしきさよさらひうるこすみ秋
まつひそまさまよろ川よそれあれ

後京極摂政家にて松延齢又と
いふ事を

寂蓮法師

きゝかよはるゝさゝき千川はたくひそ
むすしひかぬしけやけのまゝへ

亭子院の御屏風に

紀貫之

河風しなひくれけれとなからて

なくとりやきこえよすらん

寛平御時中宮歌合によみけるよ

法性寺入道前摂政太政大臣

ありあけのつきさかりさへてしまるに

こゝろけしよみちてしゆらん

宇治前関白太政大臣

宗にゆめかへらさしつゝのてこそしかな

ゆふさりはゆきふみ出てはこそ

二條前関白太政大臣

をのれはまたゆくすゑそたるさなか

ちる浜のこのれるなにさみよるひは

るいしす

近

あさしゆなかすみしとすむあけれるは

ちよふんならんのこゝろうるし

後法性寺入道前関白家百首歌よみ侍るに

正三位季経

いこく梅さらさはにけるやとりと
きこえくもひのすゑはさかえしめ
信実朝臣
きみかよ八千代とかみのうけにあまくたれ
秋もかくせ代まてしらしこそされ

建長五年三月よりしめて天王寺へ
御幸御けいつゐてよすしのうたと人
くわつりゆへいしきさ
院御製
あきしれぬ神よふる世八すゑよしの

まちもらて世はすさにくもしらし
なをしころすしのえまて
前摂政太政大臣
神よりいくよの月にあひよさかん
すゑしこゝろにすみのえのまつ
たよりと松のをいそ世々にまて
ゆつるしそて
為家朝臣
すこゝろはいくよには神さすみかけ
らく世代をはなしののすまん

正治二年十首歌合によみけるに

藤原隆信朝臣

俟古七

なかめてもよゝのうらにおとる露

こゝろはまらしなかれ涙のまへ

新古今竟宴をこなはれけるに

後京極摂政太政大臣

しきしまや風ましことのはのすゑにへて

ひろをもしむかしへかれよけ(?)

松樹延年といふことを

前中納言匡房

きみかよはみしまのいしのあまころも

たとへぬそてをいくたひかなてん

いはひのこゝろを

清原元輔

よろつよになるうへのはまのさゝれいし

こよひひろひしそこらけはちよすめ

高陽院にわたらせ給へりけるめつゝ

祝にとよませ給けるに

太皇后宮摂津

いすゝ川のすむよはちとせふる世は

きみかこまつもよゆきをみとまし

宇治入道前関白家歌合によみ侍ると
中納言定頼

やましろのてとふるえにかへるなみは
いまのうへにさくらをかくしもすし

崇徳院御時の百首歌よ
左京大夫顕輔

きこえんとしのちすとハいくしまも
いさなくとのそらしあすれなく
あいします

前参議教長

たはむれはかなくもつゆしとも
きえつへんよのちすやあまりん
百首歌よみけるに

後京極院摂政

たのつゆうちきよかひろあらハ
くるそあしろもつゆやさけり

権中納言定家

ひさかたのいろこのそハるつきき
みよしのゝのあまはなくらむ

百そとめ人よかゝれてなかき侍よ
ひけるかれもとめのすゑとかれとこよ
とひすハけふのつらよみるをめしよ
跡けし付し時
信西行意
かゝるひのうし北のかくの御くし
こゝろかやらよのきみしともなれ
守覚法親王五十首哥よ
皇太后宮大夫俊成
こゝみさよハたくめふのいくの山の

あさしあしたれみのつにわかまそ
祝の心を
後法性寺入道前関白太政大臣
ゆくすゑをまもれハふかいみかゝ
たのけきみよふおくわかきれハ
後京極摂政家よて六百首哥よみ侍けるよ
寂蓮法師
やしりくねさしそハすゑもおほつかん
たかたれの兄宮法のちとより
ゆくすゑハくもゐもあさきもゆしゝ

こゝはたくしむあまなたくしるも

千五百番歌合に

あきのくれまくすましやしくれあゝ
たこやの山より　みちさへくもん

祝部成茂

従下菅海

そのかみや梅か沢のかしかあしあるかには
うつれるあしにほはやひらくらん

賀茂重幸

あさくつもらふとそいのうらみ

りくれつるをもつれこのかめ
あいしれん

大蔵卿有家

くもゐいろりのやまもとさへ
ねさまれからにはそらにいさうれ

大嘗会御屛風に

民部大夫範輔

むらしくれふるかれぬらいしたきせよ
うけのしいとしいくよ色あらん

藤原清輔朝臣

しかくしてくりまさるよはなうつゝさう
月てらさはゆめあまゆめりめる

権中納言

まさゆらこころくさまんとこやま
こよひあかれて月をしもしれ

雲葉和歌集巻第十

羇旅歌

堀川院御時の百首歌よ

源俊頼朝臣

いくしくらやこえのさゆかしれよ
ゐなのせきもりすまのうら風

祐子内親王家紀伊

みなとえてこられとあらねふしまゆふに
あまよせくるあまめしらして

京極前関白家肥後

こゝみよ乃あしともさすまゝりかゝる
けふのやうちの志かんなかきん
ゑぬいきつゝ久

よみ人しらす

よそにのみそやわたらんすふかゝる
ひと井まさゆかきよなすらてか
おしてるやなにはのみつにやくしほの
ひさかれ比良の山かせふきこされ

中納言家持

あれてすむかきのはしかはらさいしきのへの
ゝし井のまくらなかれくる

後京極摂政太政大臣

人すまぬふはのせきやのいたひさし
あれにしのちはたゝ秋のかせ

後京極摂政家十首歌合に羇旅を

法橋顕昭

えんはこそねらうつらくかはのへにこる
いかにすゝかのせきをこゆらん

後法性寺入道前関白家百首歌に

皇太后宮大夫俊成

きよみかたくもらさやけき月とこそ
やそこゝろやされはりしくへあ
宰そさおりそもろしけり
寂蓮法師
くりそめ小さかれりるよの袖さえまて
そてよかれるかすま比らるゝ
まいしす
中納言行平
いくたひかあひみし袖さやまるしめん
ともやよかのはすむのうちすて

くもいとしかほそて
堀川院中宮上総
あかつきそてこゝろかれはあかれの夜を
うつれらさきしひのすのまきき
宰相なをもつし時旅泊月は
家内て
まくらぬるき袖のうへみなすとなる
なきてられ月のそてくぬるらん
百年守の中ま秋はあれ
源家長朝臣

ゆふなきのくもゐそへのかたにみゆる哉
とわたる舟のあとしら浪
家の千首に海旅
道助法親王
あさなきに月はいくよかくらしあかし
すまのうらすむあまとてもみるらん世
をいとふらん
後鳥羽院御製
こまつかそてらいつのまよひとをせん
あまのはらくもゐのそらのしらくも
をいとひて
西行法師
むしのねのあはれそふなる秋つく
すみかはりのありあけの月
別のこゝろ哉
土御門院御製
あさきりのよそのけふりは浪の花
しらぬよそもそれとそへてみしとき
をしの〳〵す
式子内親王

とのつるあるひとあるへことつてよ
しけの山たゝこえわたるらし

西行法師

なかれしわかまのうらにてはさかりに
むしゝのすゝみそてはかきまれ

柿本人丸

あさまたきわかうちこゆるゆきのやま
ふくとみゆるはきのいろかは

よみ人しらす

旅さなくいかによこしきみゆらぬ

しけまけ山みちのちまてこゆるしかも

後京極摂政家十首歌合に秋旅

寂蓮法師

あふさかにこゝろまによそわさされに
すゑこそをりしもなかのせれ
みやこをゝのちよ

平政村朝臣

みやこにてけふこそもむかふ行せめ
せきやまのゝ松のちもえさかきも
あけまへゆりつゝあらへとこうて

あふさかりきよらくつらさて

源俊頼朝臣

るすれしつもうらめのこゝろあさかせは
せんもそしもそ人はまうめく

於内大臣家にて人々に旅行を

藤原隆祐朝臣

すみなれしやとにもらしあふ坂の
せきのあなたにしらぬ人とか

百首御歌の中に関路を

土御門院御製

そのまゝなるをやまけのくもゝきれは
あけてはいてんおりしもむすふ

旅人は

きてそとをそへるるものとたれしへ
まるやまこゝろやとうりけるを

洞院摂政家百首歌に

藤原光俊朝臣

くもらされそてくも井のむは
いくつのくちやすらつりめる

和哥所の五首哥合に羇中暮

後久我太政大臣

くれはつるいけしくらやまかせいたく
うねよるかたそてのあはれなり

寂蓮法師

わすれなせしすゑやまかせのたかせん
まくらえんくもしめかたゝりに

建暦二年内裏にて詩歌合侍しに
羇中眺望

前中納言定家

ちしくもしくれこゝろにてねて
ほまるのれいろのそらりとそこゝ

百首歌たてまつりしに旅歌

正三位成實

あひしらをけふれのかよひはに
そてをかさしくしくまくら枕ん

前内大臣家五十首歌に旅歌を

従二位家隆

ふるさともくものしらくもしらぬあし
一夜ゆか風に秋のまかし

建保五年四月内裏歌合に冬夕旅

従二位家隆

さえくらすさやのなかやまこえくれは
これよりみゆのゆくもまよはし
あはれなりけり

和泉式部

あひころもうしめる月のかはれたる人
ころよゝさつきさやのなかやま
見てまし人とおもひこそとめのさきとも
こよひの月は見はれたるらん

人まさそひくれて秋のころ

藤原忠輔

見やこおもふみわたらこやしなへの月
それはらくしのこらこゆとしも

親故尋廻駕話従未開風風花上月送我出高山

按察使隆衡

ふるさとをやまちのれもたちつくせぬ
わかれちをそくる月はかすみけむ
あはれてけり

[illegible]

いさしられ跡つくりの古河とひきとひ
はなのちりしわかくるまてらん
五十首の中に
道助法親王
くさまくらひとよはかりの露ちらて
そてにやとりしみやこの月かけ
百首歌の中に
土御門院御製
いまそらのやまとにかへる世に
たえはてし浦のあまのたまつさ

旅のうたとて
平泰時朝臣
ちるけふはみちのさくらのあらし山
まよひきてすしかの山のゝ
あつまのみちの人のかよふに
隆寛法師
あふひとはわかれのゝちの名の
いくよかはりぬらん
和歌三首の中に露中
西園寺入道前太政大臣

くれぬとやなれしかりねにたちかへる
いくのにすゑてあまの人のなきさ
旅のそらたちよる人のおもかけ
つきてあかす

紀貫之

そしらりかりにしひとかへりしとなは
みやこのたへしとまりなりけり
色いまてす

皇太后宮大夫俊成

あはれとはきゝしそてふるなれ御
なそらすいのちにあつけゆけるとも

よこ人しれす

わけやまのもみちをぬさとたむくれは
こやこれいつくにゆく

恵慶法師

かまくらのかりそめにしをりし
こやこのいそてまつ風
みちのくのこしらふまそえ
しらけるよ

中納言朝忠

ゆきくれとのこしかしわやまくも
まよれともみよしをしまぬくらか
そのまま家路へかへれとかたる時秋
此風にふしけりゆきへり年にあたり
長まして老母乃年をしたはるか
くるひやまそよきける
播磨正実西
りうし此にすゑもさひしけりのはれ
ちくそのりみちらるやしぬらん

雲葉和歌集深草不同
川の瀬のむしの声すみわたる夜のあはれを人にしらせん
基氏
夏れ秋や時雨しくるゝ秋の梅の月 家長